

白いイカスミ

佐山ジュリー

お父さんが、「もうわすれものがあったても家には帰らないよ」と言いました。
。
わたしは、カバンの中身をチェックしました。

書いたものが初めて不特定多数の目に触れることになったのは、9歳の時。
といっても、学級担任のシミズ先生が毎号手作りする学級新聞に、
私が書いた400字くらいの作文を載せてもらったただけなのだけれど。

タイトルは「春のキャンプ」。
文字通り、まだ涼しさの残るGW明けくらいにキャンプへ出かけたことが書かれている。

よその家はどうか知らないが、佐山家はよくキャンプに行く方だったと思う。
夏になると、両親は小さな私と、もっと小さな私の弟、そしてテントやら炭やらを、
あずき色のトヨタ・ハイラックスサーフに積み込んでキャンプ場を目指した。

虫よけスプレーを駆使して真夏の森の中のコテージに泊まったこともあれば、
夏の海に沈む夕日を眺めながらシシャモを焼いたこともある。

しかしどういいうわけか9歳の年は、春にキャンプをすることになったのだ。
たしか本屋で立ち読みをしていて、良さそうなキャンプ場があって、電話をしたら空きがあり、
じゃあ今から行こう、肉を買おうホタテを買おう、という具合だった気がする。
フットワークの軽い家庭である。

私は何度もキャンプへ行ったし、数えきれないほど作文を書いたけれど、
キャンプを題材にした作文は、後にも先にもこの「春のキャンプ」だけだった。

特に何か大きな事件が起きたわけではない。

無事キャンプ場につき、明るいうちから美味しくご飯を頂き、
少し離れたところにあるお風呂でちょうどよく温まり、朝までぐっすり眠った。

唯一何かハプニングがあったとすれば、

お母さんが、「あっ、焼き鳥わすれた」と言いました。
そこで家にもどり、電子レンジから焼き鳥をとってきました。

母が、解凍した焼き鳥をレンジの中に入れっぱなしにしていたのを、
家を出て200mくらいのところで気が付き一度引き返した、ということくらい。

たった2行のエピソードにも関わらず、この話題はいつも家族の笑いの種になる。
もう13年も前のことであるのに、母が「焼き鳥忘れた！」と助手席で叫んだことを思い出しては
、
あのときさあ、お母さん焼き鳥忘れたよねえ、とか、
みんな、忘れ物ない？"お母さんの焼き鳥のとき"みたいなこと、ない？とか、
そう言って親子で笑う。

おそらくそのうち忘れていくであろう事柄を、9歳の私がうっかり作文に書き留めた。
そうしてそのエピソードは13年間も、いきいきと家族の記憶に残っている。

星がとても近く、手がとどきそうでした。またぜったい来たいです。

きっともう10年、「春のキャンプ」は家族の記憶に残る。
きっと死ぬまで、私はキャンプに出かけた春を忘れない。